
IS-Blitz <インフィニット・ストラトス-ブリッツ>

世刻希望

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS - Blitz > インフィニット・ストラトス・ブリッツ<

【Nコード】

N8747W

【作者名】

世刻希望

【あらすじ】

要するに、妄想爆発型の、二次創作作品です。

三人目の『ISを起動できる男子』として『IS学園』に転校した、『卯月・ゲイブリッジ』の物語です。

転校生はメカニック!? (前書き)

序章

転校生はメカニック！？

3月某日・カナダ・ゲイブリッジ社・午前10：44

「おい、そのボルトとナット二つずつ寄越せえー！」

「 balanサー 持って来おい！」

「コイツを向こうの格納庫に持ってけ！」

「オイル足りんぜー！予備は？」

野郎の野太い声だの、機械音だのが飛び交う、『IS >インフィニット・ストラトス<』の下請け生産企業、『ゲイブリッジ・コーポレーション』。その工場が俺、『卯月・ゲイブリッジ』の職場である。

ISって言うのは、『>インフィニット・ストラトス<』と呼ばれる『女性にしか反応しない兵器』である。『篠ノ之束』という一人の天才が作り出した、(『宇宙空間におけるマルチ・フォーム・スーツ』が本来の目的らしい)世界を巻き込む発明であった。で、ウチはそんなふざけた兵器のパーツ、武装などの生産を引き受ける、割と信頼されてる会社だ。

「おい卯月、『ジャッカル』の組み立て100丁出来たかー？」

「完了、今運ぶー。」

俺は15歳だが、『機械イジリ』という仕事が大好きで、これで五年目だ。とりあえず、先程仕上げた『ジャッカル』達を専用のリフトに積み込み、向こうにいるウリバタケのおっさんに輸送する。上手くおっさんの前に運搬すると、早速話しかけてきた。

「サンキュ坊主、随分板について来たな。」

「そんな大層なもんじゃねえよ、まだ本体が組み立てられる程度だろ。」

「いや、それでも五年でこれは早いぜ？俺なんか八年かかったんだからよ。」

「ちなみに、イジっていた機械つてのは、ISの事だ。工場をいつものように見ている内に、『いつか、俺もこんなヤツを作りたい』って思ったのが始まりだった。それから社長に頼み込んで、ウリバタケのおっさんの指導で簡単なパーツの設計、開発の技術を仕込まれた。幸い、腕利きの技師が揃っていたから、多少の自信はある。勿論、「学問を学ぶ事」が条件だったから、そちらも必死に勉強した。勉強とオイルにまみれる生活だが、『楽しい』と感じるものを職業に出来るのは、実に嬉しい。」

「そうそう、なんか荷物が届いたらしい。今みんな手が空かないから、お前行つてくれ。」

「わかった。工場の清掃用の洗剤だろうがな。」

と、会話もそこそこに回れ右。生産ラインから離れて事務所に向か

う。だいたい駆け足で五分の距離だから、軽いジョギング気分だ。
左に曲がって危険物のセンサーをクリア。そのまま扉を開けて事務
所に入る。

「卯月くんおはよう。」

早速、受付のお姉さん（26）が声をかける。流石、ナイスなスマ
イルだ。

「荷物来たって?」

「ええ、ホーラさんが預かっているわ。」

「了解。」

とにかく用件を済ませ、ホーラの姐さんの机に向かう。

「お、卯月君かい?ウリバタケもわかってるねえ!」

アッハッハって愉快そうに笑ってるホーラ姐さん。ちなみに社長以
下、ウチの会社の大半はこんなノリだ。

「ホラ、コイツが荷物さね。さっさと行きな、ウリバタケが待つて
るだろ?」

と、優雅に書簡を引き出し俺に差し出す。姐さん、ウリバタケのお
っさんのこと、良く理解してらっしゃるぜ。

「ありがとうございます、失礼しました。」

「おう、嫁さんが娘さんのラブレターかもな。」

……からかい好きだな、この人。

「オッス、ご苦労さん。」

5分後、来た道を戻り、ウリバタケのおっさんに、書簡を手渡す。

「ん、『計画』についてか……。」

封を切り、手紙を読んで行くおっさんの顔が、次第に怒りと呆れを
ないまぜにした複雑な顔に変わる。声をかけようとした俺を制して、
壁の端末を操作して、『全員集合』のアラームを鳴らす。

「おっさん？」

「卯月、こりゃ大損だ。」

「……？」

「『はあ~~~~!?!?』」

現場の野郎共全員が一斉に声が上がる。

「どういことつすか、チーフ!」

「それって……ガラクタを作ったって言ってるようなモンでねえかチーフ!」

……ちなみに、チーフとは、ウリバタケのおっさんの事だ。メンバーの怒りに対して、こちらもやるせない表情で、再び口を開く。

「言葉通りの意味だ。『計画』担当者が事故で死亡。代理がいねえからこの話しはお流れた。」

『はあ……。』と、全員がうなだれたり、天を仰いだり様々だ。

「卯月、今日のお前の昼の予定を変更だ。お前に解体作業を実践で教えてやる。第二格納庫奥に来な。」

「了解です、チーフ。」

こんなに落ち込むおっさんは初めてだ。だから敢えて『チーフ』と呼ぶ。おっさんは力なく「あんがとよ」と呟くと、号令をかけて作

業を再開させた。

午後・1:22

「おう、待たせたな。」

「いえ、さつき来たところですよ。」

「ケツ、野郎に言われたら背筋が凍るぜ。」

昼食の後、早速第二格納庫奥にある『専用IS保管庫』の扉の前に立つて、おっさんを待っていた。いつまでもウダウダしないのは、彼のタフさの表れだ。

「さてと、そんじゃ開けるぜ。」

そう言つて認証カードを通し、中に入る。中には、三体のISがある。とはいえ、機体そのものが組み上げられているのは一体のみ、それ以外は基礎フレームまでしか出来てない。

「……………」

「やっぱり、寂しいか？」

「ええ、せつかく本格的に携わったヤツですから。」

俺が見つめているのは、第二世代の機体、『ラファール・リヴァイヴ』の改造機である。コイツは、この機体の特徴、機動性を追求して、奇襲、強襲に特化させたものだ。そして、コイツは俺が設計、開発を初めて任されたヤツなのだ。

「感傷は後だ。ま、まずはコアの摘出作業だ。その解体用の工具箱持ってきてな。」

「了解。」

言って、近くのでかい工具箱を取りに行く。自分が作ったんだ。真面目に作業するのは、俺のポリシーだ。

「まずは、コア外周のアーマーを外すんだ。『ラファール』だからやり方は…」

こんな時のおっさんの指示は非常に冷静かつ的確だ。慎重に背中 of アーマーを外すと、綺麗に輝く球体 - 『コア』が露出した。この『コア』は、誰にも作れない貴重な物で、絶対に乱暴に扱えないのだ。

「よし、グローブをはめたな？じゃあ、コアを抑えとけ。次の工程は危ねえから、しっかり見ときな。」

「了解！」

そしてコアに触れた - - 時の事だ。

キユイイイイイン！

「…………え？」

「なんだ、コイツは…？」

触れた途端、頭の中を様々な情報が流れ込む。そして -

『コア適合。本ISの起動状態へと以降。パーソナルデータ、取得開始します。』

「おいおい、コイツァ…………ISが起動したのか!？」

「そんな…男には反応しないんじゃないか…？」

呆然とする俺達を無視して、ISは無機質な声が響く。

『パーソナルデータの取得完了。本機は卯月・ゲイブリッジを搭乗者として登録致します。』

「「な、なんだってええええええ！」」

こうして、俺の世界は、大きく変わっていくのだった。

転校生はメカニック!? (後書き)

こんな感じから、どんどんぐだぐだになる可能性が高いですが、それで良ければ、よろしくお願いします。

おいでませISS学園（前書き）

第一章

おいでませIS学園

数ヶ月後・日本・IS学園周辺

「はあ……………」

現在、車に乗って、IS学園に向かっている。俺は、何度目かわからんため息を漏らす。

「あのさあ、いい加減腹あ括りなよみっともない。男の子だろう。」

隣で車を運転している赤い髪の女性がウンザリ顔でこちらを睨む。彼女はクリスチーナ・バディム。ウチの会社の武装及びパーツのテストを行うテストパイロットで、尚且つ、第一回『モンド・グロツソ』トップ3の実力者である。

「もう起動させたものは仕方ないんだ。それに、世界のモルモットになりたく無いだろ？」

「……………ですね。」

幾度となく車内で繰り返してきたやり取り。もうマンネリ化してるし。

「ま、社長が政府に掛け合った結果だ。素直に受け取んな。」

「ええ、わかってます。」

あんなこと（起動事故）があつた後に、実際にウチの会社は大混乱

した。ウリバタケのおっさんが社長に報告。すぐさまカナダ政府が事情聴取に飛んできて、是非俺を預からせて欲しいと打診も来た。

なんでも、『世界で初めてISを起動出来た男子』って奴が、今年IS学園に入学した直後くらいのタイミングでのこの起動事故。しかも、きちんと俺を搭乗者に登録しやがったもんだからタチが悪い。

「入学要綱その他諸々、きちんと読んだか？」

「あれなら三日間ぶつ通しで読みました。」

結局俺に渡されたのは、入学要綱と、入学手続きの書類、更には制服の仕立て（カスタム可能らしい）に関する希望書。挙げ句、国際ISメカニック技術資格準二級を前倒しで取得させられた。（三級は持ってた。）

「へえ、流石ウリバタケチーフの一番弟子、『ゲイブリッジ社の隠し玉』の二つ名は伊達じゃ無いねえ。」

「単に物覚えがそっち限定で良いだけです。」

ふて腐れ感バリバリに返事する。正直、工場以外の空気、しかもほぼ全員女性の花園にほおり出される。しかも政府からの命令、やってられない。

「ははは、まあ、漢と油と汗とISパーツだけの人生よりましさ。そもそも、お前まだ女作らないとかどんだけジイサン思考だい？」

「野郎共にからかわれるのは嫌だね。」

てか、ウチの連中はどうしてそんなネタばかり要求するんだか。

「あんな、社長は本当にアンタを幹部クラスにしたいって言ってるし、将来楽しみな息子だって期待してるのさ。」

「……『息子』、ねえ。」

「でも一番心配なのは、人生のパートナーを作る様子が無いところ、とも言っていたよ。そろそろあの人を安心させてあげな、わかったね?」

「……で、全員で一斉にからかう、と?」

「当たり前だろ!!」

笑顔で解答されたよ……。

「ま、ISに関しての設備は充分、学生の割に環境は破格、オマケに美人がよりどりみどり!しっかり学べよ?」

「……ま、死なない程度にはやりますよ。」

あくまでも豪快に言い切るコーチ、対して俺はどこまでも憂鬱だった。

「ほら、んな態度はやめな。織斑にやられるぞ。」

「……『ブリュンヒルデ』のお仕置き、ですか?」

『ブリュンヒルデ』とは、第一回『モンド・グロツ』にて優勝したIS搭乗者に与えられた最強の称号で、それがIS学園に現在教鞭をふるっているらしい。名前は『織斑千冬』 - 同大会準決勝にてコーチが負けた相手らしく、時々「織斑は強い！」って体験談を喋っていたな…。

「アンタの態度じゃ、頭が潰れるね。もう少し礼儀正しくしな。」

「……………普段から社長とタメ口きいてる癖に。」 - ボソツ

ちよつと文句が言いたくなつたが、ここは道路、更にIS学園はまだ遠いし、車から追い出されかねないから、小声で漏らす。

「…で、その制服…。」

「なんです？」

「学生って言うより……………修り」「言わせません。」

そう、この学園は、個人個人の希望で制服をカスタムして貰えるらしい。で、俺もカスタムして貰えたんだが、どうやら女性には受けないデザインらしい。

カスタムとはいえ、単にズボンのポケットを両太ももの部分と右腕の上腕部分に追加したただけなんだけど…（中身は、主に専用グローブに最低限のツール）。

「まあ、『ISに乗れるISのメカニク』って触れ込みだから、らしい格好だけど。」

と苦笑しながら徐々に車を減速させるコーチ。目の前では、外来専用道路出口付近にいた警備員がこちらに誘導のサインを出していた。

「失礼ですが、身分証明をお願いします。」

そのまま、近づいた警備員が尋ねる。

「はい、ゲイブリッジ社からクリスティーナ様に卯月様ですね？承りました。そちらのゲートからまっすぐ行けばIS学園です。」

コーチは俺の入学証明書を見せて何事か話す。警備員はそう言っ、学園直通のゲートを開いた。

「さ、後少しだ、我慢しなよ。」

「……………」

「へ・ん・じ・は？」

「……………はい。」

学園に近づく程、どんどん憂鬱さが増す。…マジ帰りたい。

しかし、そんな気持ちに関係なく、俺の視界にはIS学園が『諦める』と言わんばかりに迫っていた……。

「さあ、卯月。ここが世界の『IS学園』だ！感想は？」

「ただっ広いつすね。」

「気分はどうだい？」

「……最悪です。」

……結局、俺一人では解決できない問題（IS学園〃女子校）は、俺を飲み込んでいた。コーチは陽気になっているが、そんなテンションにはなれない。

「…さてと、私について来な、職員室に行くぞ。」

そうして、コーチは歩きだす。『ついてこい！』って雰囲気。仕方なく、気分を切り替えてつて行く。中は想像以上の広さで、地図なしではまず迷子になるだろうな。コーチは、迷うことなく職員室まで歩いて行く。

「織斑は元気かね。」

ちょっと呑気な気もするけど。そして歩くことジャスト3分、職員室前まで辿り着いた。

「さあ、開けるぞ。」

「…え？」

「ガラガラガラ！きよとした俺を無視して、豪快に扉を開く。

「おおーいい、織斑あ、久しぶり！」

更に大声で挨拶（？）するコーチ。当然、部屋の中に居た先生方は呆然とする。いきなり視線が集中して困っていると、黒いスーツをしつかりと着こなした一人の黒髪の女性が、慥然とした表情で口を開いた。

「何の用だバディム、今は朝の職員会議中だぞ。」

「おう、元気そうじゃないか織斑、去年よりも美人になってさ！」

「……バディム、何・の・用・だ？」

…なんか会話が噛み合わない、つてかこの女性怖っ！

「ああ、こないだ連絡入れたる？例のウチの勤務先の男子を連れて来たぞ。」

「なら先にそれを言え、このお調子者が。」

「ま、そう固くなんなよ。で、改めて紹介する。卯月、挨拶しな。」

「はい。卯月・ゲイブリッジです。カナダから来ました、よろしくお願いします。」

とりあえず定型文からのお辞儀。商談相手への礼儀作法は仕込まれ

ているから、これくらい簡単だ。

「ま、ウチの会社のホープだ。仲良くしてくれ。」

「……さて、ゲイブリッジ。顔を上げる。」

…コーチ無視か。

「お前の他に二人、転校生が隣の部屋で待っている。さっさと行つて来い。」

そう言つて、奥の扉を指差す。軽く二人に会釈をして、扉に向かう。

コンコン・

「…失礼します。」

軽くノックして入る。そこには、確かに織斑先生の言う通り、二人の生徒が居た。一人は、左目を眼帯で覆っており、かつ赤い右目からは絶対零度のような冷めた眼差しで、俺を一瞥すると、興味なさげに顔を逸らした。

「……………」

で、もう一人は…。

（男…？）

そう、ベーシックなタイプだが、『男子』の制服を着た奴が、いた。とりあえず、ソファに腰掛ける。勿論、男子の隣に。

「……………」

こちらは、中性的な顔で、背中の中程まで伸ばした見事なブロンドの先端を小さなリボンで纏めている。さっきの眼帯少女と比べて、友好的な目をしている。そんな事を考えていると、教師が二人、部屋に入ってきた。

「えっと、揃っていますね。」

…なんだか、無理に『私大人の女性です!!』って主張している感じの、ちょっぴり身長の高い人が声をかける。

「私は、一年一組の副担任の山田真耶やまだまやです。今回は転こ…」「さて早速なんですけど、ハンコは持って来た?」

山田先生の台詞をスルーして、なにやら楽しげにしている女性が書類を差し出す。

「これの下に名前を書いて、ハンコを押してね。」

こちらの先生は、本当に愉快そうな顔で説明する。山田先生はしょんぼりしている。俺は、さっさと名前を書いて判子を押して、書類を渡す。

「…はい、確認完了。山田先生、クラスの割り当てはどうですか?」

「は、はい!」

改めてクラス表を確認する山田先生。…で、隣の先生は、ニヤリとした表情で俺達を見つめる。なんだろう、この先生?

「はい、三人のクラスですが、ボーデヴィツヒさん、デュノアくんは一組。ゲイブリッジくんは三組ですね。」

結果を報告する山田先生の隣の先生は、「よっしゃ、男の子ゲット」
「とか言って喜んでいた。」

「ありがとうございます、山田先生。それじゃあ早速行きますか？」

特に異論も無いから、頷く。が、眼帯少女・ボーデヴィツヒさんというらしい。が口を開く。

「織斑一夏は一組にいるのか？」

「えっ？はい、織斑くんは一組ですよ。」

一瞬きよとした山田先生だが、すぐにニツコリ笑って返す。ボーデヴィツヒさんは、「うむ……。」とか言って、不穏な空気を振りまく。なんか感じ悪いな。

「山田先生、終わったか？」

そこに、織斑先生が入って来る。途端、ボーデヴィツヒさんの振りまく空気が霧散した。…良く分らん。

「はい、それじゃあ、二人を連れて行きますね。」

「ああ。」

山田先生と織斑先生は手短かに会話を済ませると、山田先生が二人

に手招きする。…そして、織斑先生が、もう一人の先生に話しかける。

「グラッセ先生。貴女の要望通り、一人そちらに回りましたよ。」

「はい、ありがとう千冬先生！これで面白い一年が過ごせます。」

…面白って……。

「あ、自己紹介を忘れてたわ。私はノイン・グラッセ、一年三組の担任よ。ノインちゃんって呼んでね。」

と、グラッセ先生が明るく自己紹介する。

「……………わかりました、グラッセ先生。」

「かったいなあ。ウチのクラスはアットホームがウリだから、そんなどと一年間つまんないわよ？」

「わかりました、グラッセ先生。」

「…はあ、まあ良いわ。それじゃ千冬先生、この子は貰って行きますね。」

「わかったからさっさと行け、山田先生が困っている。」

確かに、山田先生と他の二人がこちらを見ている。特に山田先生は「まだですか？」と子犬みたいな目で見ている。

「おっ、織斑。私もちよつと失礼するよ。妹に挨拶してくる。」

「あまり騒ぐなよ。」

「りょーかい。」

ため息をつく織斑先生。対してコーチは軽く手を挙げて、俺に近づく。

「「失礼しました。」」

俺とコーチ、もう一人の男子との声がシンクロする。ちなみにボーデヴィツヒさんは無言だった。

「いやあ、クリスさんが来るって、クラス中前日まで大騒ぎだったんですよねー。」

「おう、かなり人気なんだな。」

「……コーチ、わざわざIS学園で何をしてたんですか？」

道中、グラッセ先生とコーチの会話が気になり、質問してみる。

「ああ、ウチの妹も三組なんだな。毎週二日は逢いに行ってたらしい。こうなった。」

「……はあ。」

なるほど、だから特訓が週に三回だったんだな。

「……………（無視）。」

「……………（苦笑）。」

「……………（興味）。」

ボーデヴィツヒさんは変わらず無視、男子は多分コーチの無茶振りがツボったんだろう、苦笑している。山田先生は、なんか楽しげに聞きながら歩いているな。とにかく、肩身が狭かったから、男子・デュノア・に話しかける。

「お前も、偶然起動しちゃいました、ってところか？」

「うん、そんなところ。君も災難だね、こんなに美人がいっぱいな学園で生活なんて。」

「それ、そのまま返すよ。ま、変な噂が流れん様にしようぜ、お互いに。」

「うん、そうだね。」

「デュノアくん、ボーデヴィツヒさん、到着しましたよ。」

山田先生がこちらを振り返り、告げる。

「おっと、じゃあここまでだな。えっと…」

「シャルル・デュノアだよ、よろしく。」

「俺は卯月・ゲイブリッジ。卯月で構わん。」

「わかったよ卯月。僕の事もシャルルで良いよ。」

「はいはい、談話は休み時間にしなさい。卯月君はこっち。」

…チツ。

一年三組・教室前

「はい、君の教室に到着したけど、気分はどう？」

「……………最・悪・です。」

「もー、往生際の悪い子ね。指導不足じゃあないの、クリス？」

「そいつは、工場のオッサン連中に言ってくれよ。私も困ってんだから。」

…………指導かよ…。しかし、もう逃げられない。逃げたらモルモットだし、何より工場みんなに迷惑がかかる。気を改めて、とにかく今日をどうにか凌ぐ事を考える様にした。

「じゃあ、先生が呼んであげるから、それまで待機ね？」

「はい。」

「安心しな、私も入るからさ。」

「はあ……。」

さつさと先生が教室に入って行く。コーチも入るのかよ。

「……はい、入って来なさいな。」

先生が手招きする。深呼吸をして、教室に入った。

『『『……』』』

ああ、およそ30人の視線が突き刺さって痛い……。

「……卯月・ゲイブリッジです。……か、カナダ政府から要請を受けて来ました。よろしくお願いします。」

「はい、良くできました。みんなも仲良くしようね。」

「コイツは女に免疫無いから、どんどんしごいてやってくれ！」

……ふう、とりあえず自己紹介は終わったな。まあ、好奇心丸出しな視線は変わらないが。……あとコーチ一言余計だ。

「はい、じゃあ卯月君の席はあそこね。」

そう言つて、先生が教室のど真ん中を指差す。……つてすげえ目立つじゃん！

「…わかりました。」

異論も唱える気力も失せた俺は、二人から逃げる様に席に着く。

「さて、じゃあ授業の時間で……、卯月君への質問TIMEにするぞ！」

「「「「おおー——」「」「」」」

……もういい、なるようにしかならないや。俺は脱力して机に突っ伏す。三年後、無事に卒業するビジョンは……もう思い描けなかった。

おいでませIS学園（後書き）

オリジナルキャラクター紹介

卯月・ゲイブリッジ？

年齢：16歳

誕生日：4月24日

身長：168cm

今回の作品の主人公。

カナダのIS企業の「下請け会社」である「ゲイブリッジ社」の社長の息子にして、従業員。10歳の時にISの基礎知識本を読んだから、「自分もISを作りたい！」とISの世界にはまり込み、猛勉強して現在に到る。

工場見学や作業員とのコミュニケーションにより、機械関係には多少明るい、それをひけらかしはしない。

「メカニツクな馬鹿」であり、特にISには敏感。なので、壊れたISに関しては時に暴走する。

一般知識も勉強するのを働く条件になっている為、人並みの知識はある。

同世代の女性に特に免疫がなく、IS学園に行くのを嫌がっていたのはそれが理由。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8747w/>

IS-Blitz <インフィニット・ストラトス-ブリッツ>

2011年11月23日21時52分発行